



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

Classes to acquire "logical writing ability" : Efforts of school setting subjects " Contemporary Japanese Language I" and "SSH Contemporary Japanese Language I"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日渡, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173704

「論理的に書く力」を獲得する授業

— 学校設定科目「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」の取り組み —

Classes to acquire "logical writing ability"

— Efforts of school setting subjects

"Contemporary Japanese Language I" and "SSH Contemporary Japanese Language I" —

国語科 日 渡 正 行

<要旨>

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は、「論理的に」「書くこと」の力を育むために作られた学校設定科目である。国語にとどまらず、生徒たちが他の科目や探究で使える力を培うことを目指し、様々な試行錯誤がなされた。試験はなく、パフォーマンス課題とルーブリックを利用して、生徒の力を評価した。令和3年度でこの学校設定科目は終了となるが、新しい学習指導要領の「現代の国語」に確実につながっていくものとなっており、他教科や探究活動との連携をさらに深めていく必要がある。

<キーワード> 書くこと 論理 言語活動 表現 学校設定科目

1 「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の概要

1-1 科目設定の目的と経緯

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は「論理的に書くこと」を目的とした学校設定科目（高校1年生、1単位）である。現行の学習指導要領によれば、1年生の国語総合は「総合的な言語能力を養うため、内容のA、B、C及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕について相互に密接な関連を図り、効果的に指導するようにする。」^①とある。「国語総合」は「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」そして「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」についての力を育む教科であり、総合的にことばの力を育てることを目的とする。本校の学校設定科目「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」はそのような「総合的に」という部分から離れ、「書くこと」に集中する。また、「書くこと」は、論理的なことばのみを想定しているわけではなく、ものの見方・考え方を豊かにするという感性的・情緒的なことばを書くことも含まれている。「国語」全体としては、「書くこと」だけに偏らず、そして「書くこと」における「論理／感性」にも偏らずに、総合的に学んでいくことが目的になるだろう。しかしながら、「書くこと」の「論理」的な部分に特化して実施されたのが「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」である。現行の学習指導要領の「国語総合」「書くこと」の「イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。」^①に当たる。

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は国語の領域における横断性や総合性は目指さないが、教科や科目を越えた横断・総合は強く意識している。「現代文Ⅰ」が学校設定科目として作られるとき、「国語」側の思いと他の教科からの要望とが重なり合うことで、「論理的に書くこと」に特化した内容が構想された。もともと本校では、各教科で多くのレポート課題を課している。例えば、1年生の「地理実習」(地理A)「野外実習」(地学基礎)のレポート。地理Aや保健の授業で、プレゼンテーションを行い、それをレポートにする、等々。それらのレポートにおけることば遣いについてどのように扱っていけばいいかということは、本校国語科の長年の課題であった。また、各教科からも、論理的な文章を書くことについて、国語で集中的に行ってほしいという要望が出されていた。その要望は、探究活動によって生徒たちが長い論文を書く機会が増えると、ますます強まっていった。その状況を踏まえて生まれたのが「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」であるため、他教科や探究活動との連携を常に意識する科目となったのである。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は他教科や探究活動との関係において、横断的であり総合的である。

平成27年度にカリキュラムが改まるのをきっかけに、「現代文Ⅰ」が構想された。1年生は、それまで「国語総合」5単位のなかで、現代文編2単位・古典編3単位が実施されていた。その「国語総合」を標準単位数の4単位に

変更し、そこに「現代文Ⅰ」1単位を加えたかたちで、1年生の国語が新たに構想されたのである。古典が1単位減ることになるのは、国語科としては逡巡を感じないわけにはいかなかった。高校の「国語総合」における古典の意義が減じたわけではなく、古典に使うことができる時間が減ることは、取り返しがつかないことになるかもしれない、という思いは国語科の教員にもあった。それでも、話し合うなかで、「論理的に書くこと」に特化した授業が必要であろう、という結論に至った。他の教科からの要望もあり、そして何よりも「国語」におけることばの扱いについて、論理的なことばを表出していく力は今後ますます必要になると考えたからである。

学校設定科目の名称については、様々な案が出されたけれども、週に1回実施するので「現代文Ⅰ」という案が採用された。「国語」「現代文」「論理」「書くこと」「表現」等のキーワードはあるものの、それらを組み合わせても、なかなかじつくりとこなかった。特に、「表現」というキーワードは「国語表現」というものと重なり、「(国語科)的に」意図が分かりやすくなる一方、既存の科目のイメージが教員の中に生じてしまう恐れがあった。これまでの「書くこと」中心の科目以上に、「論理的に書くこと」だけに集中した授業の名称として、例えば「論理表現」では相応しくないのではないかという話になった。そこで、紆余曲折はあったものの、かなり抽象的な名称である「現代文Ⅰ」が採用されることになった。「国語総合」の「現代文編」とは違う科目であり、また、2・3年生の時に実施する「現代文B」にもつながらない名称のつもりである。また、先ほども書いたが、この「Ⅰ」は、「Ⅱ」や「Ⅲ」に発展していくものではなく、週に1回行われるという意味での「Ⅰ」である。

2人の教員が4クラスずつ担当する、というかたちで始まった「現代文Ⅰ」だったが、試行錯誤の結果、4名で2クラスずつを担当するという流れに落ち着いた。本校の1学年は40数名のクラス×8クラス。その半分ずつを2人の教員が担当するというやり方は、生徒が書いたものを確認し評価する「現代文Ⅰ」の授業のあり方とうまく合わなかった。負担の集中を招いたためである。6名の教員で1～2クラスを担当するというかたちも試したが、週に1回の1クラスだけ、という状況は授業づくりの費用対効果という面で効率性に欠けたものとなった。試行錯誤の結果、最終的には、それぞれの授業の内容と課題とがほぼ完成していたから、ということもあるかもしれないが、4名の教員が2クラスずつ担当する、というかたちで落ち着くことになった。

平成30年度、「現代文Ⅰ」は名称を変更し、「SSH現代文Ⅰ」になる。それまでもSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の中核であった探究活動を強く意識し、論文の書き方を学ぶ授業になっていた。単なる文章の書き方にとどまらず、探究のテーマの見つけ方、帰納・演繹といった思考の進め方なども「現代文Ⅰ」の授業内容に含まれていた。そのように、SSHにつながる授業が、数学や理科だけではなく、国語でも積極的に行われていることをアピールすべく、「SSH現代文Ⅰ」へと名称を改めたのである。SSHの取り組みでも、テーマの決め方や論理性といった内容は、1年生のSSH探究基礎の講座に吸収したりしている。名称が変わったことによる内容の変更はなかったが、生徒と教員とにSSH・探究活動につながるものとして学んでいるという意識が芽生えることになった。

「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」が目指している「論理的に書くこと」は、国語全体から考えると、ごく一部の領域に過ぎないが、領域を狭めることによって目的が明確となった。また、他教科や探究活動とのつながりを意識し、実践的に「書くこと」を意識した授業内容になっている。そのため、他の授業との連携の試みることもなった。

1-2 「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」の流れ

「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」の対象学年は1年生、週に1回の授業である。1年生では「国語総合」4単位(現代文編2、古典編2)も実施しており、それと並行して「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」が進んでいく。「国語総合」では従来通りの「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の授業を行い、それとは別に「論理的に書くこと」を目的とした「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」がある。「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」は「国語総合」から独立しており、いわゆる教科書は扱わず、授業の1時間から2時間程度で終わる課題に取り組むことで書く力を育む。定期考査は行われず、課題への取り組みを中心に評価される。学習材はA4で配布し、各人に配られた二つ穴のファイルに綴じていく。課題も基本的にはA4の用紙に書いて、提出する。ただし、令和2年には本校では生徒が1人1台、パーソナルコンピュータを持つことになり、Googleクラスルームで課題をこなすことも多くなっている。新型コロナウイルスへの対応でオンライン授業が実施されるようになって、PCでの課題提出はいっそう増えてきている。

「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」は短い文をつくるとこ

ろから始まり、3学期には800字程度の意見文を書くことになる。1学期はより良い「文」を作ることを目指す。2学期は複数の「文」からなる「パラグラフ」を意識して文章を書く。3学期は複数の「パラグラフ」を組み合わせた「文章」を書く。3学期に800字程度で書いていく意見文が一年間の総まとめとなる。

発足当時、「現代文Ⅰ」には「論理的に書くこと」の他にも「探究活動」という柱があったが、次第にそれは別に時間に行うものになっていく。「探究活動」については、テーマや仮説の設定や論理的思考を中心に、2年生の活動につながる内容を実施していた。「書くこと」から独立していたわけではないが、1学期にテーマを考えるところはどのようなことなのかを確認し、2学期には自分なりのテーマを考える。2学期終わりから3学期にかけて、テーマについて言語化する、というもう一本の流れがあった。しかしながら、「探究活動」に関しては、1年生に対して「SSH探究基礎」^②という時間が作られることになり、「現代文Ⅰ」で行っていた内容はそちらに移っていくことになる。例えば、「テーマ決め」や「帰納・演繹の考え方」は、「現代文Ⅰ」で国語の教員が行うものから、「SSH探究基礎」の講座として、他の教科の人たちも含めて実施されるようになっていった。

以下に、平成27年度の「現代文Ⅰ」の流れを示す。

【平成27年度「現代文Ⅰ」】

〈1学期〉

- ①導入、「現代文Ⅰ」とは何か（1年間の流れを示す）
- ②読点の打ち方（日本語の特色、分かりやすさに向かうためには）
- ③短文への意識（わかりにくい文にならないための心構え）
- ④練習課題、和文和訳（無生物主語という概念を中心に、日本語を日本語に書き換えてわかりやすい文章について考える）
- ⑤テーマ決定の練習1（クラスでグループを作り、探究や仮説について考える）
- ⑥テーマ決定の練習2（自分なりにテーマを作り、仮説として成立しているか見合う）
- ⑦地理実習、過去の悪文検討（地理実習のレポート作成に絡めて、過去の悪い表現の例を参考に、より良い表現を考える）
- ⑧地理実習レポートの再現・検討（自分たちが書いた地理実習のレポートを素材に、よい文章・悪い文章について考える）

- ⑨名文と悪文（名文・悪文と呼ばれるものの特徴、小説や詩のことばと、論理的文章のことばの違い）

- ⑩テーマ決定に向けた課題（夏休み中に考えておくべき探究のテーマについて）

〈2学期〉

- ①二重の意味を持つ文章
- ②縮約の仕方（要約の一種である縮約を通して、文章の中核、筆者の述べたいことを意識する）
- ③縮約の実践（実際に縮約をしてみて、文章の論理構造等について学ぶ）
- ④演繹と帰納
- ⑤要約の仕方（要約を通して、文章の書くとなる部分や筆者の意見について意識する）
- ⑥要約の実践（実際に要約してみて、縮約との違いを考えながら、文章の構造について学ぶ）
- ⑦パラグラフ・ライティング入門（トピックセンテンス＋サポーティングセンテンスという基本を学ぶ）
- ⑧パラグラフ・ライティング課題（探究テーマを200字で書くことを通して、探究テーマについて考えつつ、パラグラフ・ライティングを実践する）
- ⑨パラグラフ・ライティング振り返り（お互いに書いたものを見合って、探究テーマについて考えつつ、パラグラフ・ライティングを身につける）
- ⑩探究テーマの決定について

〈3学期〉

- ①パラグラフ・ライティングの振り返り
- ②800字意見文1（書き方とループリックの説明）
- ③800字意見文2（課題文読解）
- ④800字意見文3（意見文を書く、1回目）
- ⑤800字意見文4（課題文読解）
- ⑥800字意見文5（意見文を書く、2回目）

（下線を引いたものは、探究活動に関わる活動）

以上、平成27年度は、「書くこと」と「探究活動」の双方が柱となっていた。また、地理実習のレポートと絡めて、他教科との連携（ここでは「地理A」）も進められていることが示されている。例えば、他の教員は、〈一学期〉の課題として、「岩石の観察と説明」（「地学」との連携）を入れており、また別のかたちで他教科と連携している。

一方、令和3年度は以下のようになっている。

【令和3年度「SSH現代文Ⅰ」】

〈1学期〉

- ①導入、「現代文Ⅰ」とは何か（1年間の流れを示す）
- ②800字意見文（3学期意見文作成後に比較するためのもの）
- ③短文への意識（わかりにくい文にならないための心構え）
- ④練習課題、和文和訳（無生物主語という概念を中心に、日本語を日本語に書き換えてわかりやすい文章について考える）
- ⑤二重の意味を持つ文章
- ⑥論理とは何か1（帰納・演繹について学ぶ）
- ⑦論理とは何か2（帰納・演繹について学ぶ）
- ⑧名文と悪文（名文・悪文と呼ばれるものの特徴、小説や詩のことばと、論理的文章のことばの違い）
- ⑨RST（リーディングスキルテスト）の実施（「教育のための科学研究所」が作成したテスト。結果は2学期に返却）
- ⑩わかりにくい文章を改善する課題（学年共通のもので、1学期の総まとめ課題として設定）

〈2学期〉

- ①パラグラフ・ライティング入門（トピックセンテンス＋サポーティングセンテンスという基本を学ぶ）
- ②200字のパラグラフを書く（自分の意見・考えを200字でまとめる）
- ③要約の仕方（要約してみても、評論で述べたいこと、そのための論理構造をつかむ）
- ④要約の実践1（文章の読解）
- ⑤要約の実践2（200字での要約）
- ⑥要約の実践3（文章の読解）
- ⑦要約の実践4（200字での要約）
- ⑧要約とパラグラフ・ライティングについてのまとめ
- ⑨パラグラフで意見を書く1（構想を練る時間）
- ⑩パラグラフで意見を書く2（200字で書く）

〈3学期〉

- ①パラグラフ・ライティングの振り返り
- ②800字意見文1（書き方とループリックの説明）
- ③800字意見文2（課題文読解）
- ④800字意見文3（意見文を書く、1回目）
- ⑤800字意見文4（課題文読解）

⑥800字意見文5（意見文を書く、2回目）

（下線を引いたものは、探究活動に関わる活動）

平成27年度と令和3年度を比べると、「探究活動」についての内容がなくなっている。令和3年度は、新型コロナウイルスへの対応のため、しばしばオンライン授業を挟みながらの実施となったが、そのような特殊な状況である点を考慮しても、「探究活動」関連はほとんど実施されなかった。

探究活動の「テーマ決定」について行っていた部分は、月に一回、土曜日に実施される「SSH探究基礎」の講座の中に吸収されていったために、「SSH現代文Ⅰ」で、直接、「探究のテーマ」について扱わなくなっただけであり、発足当初からの「論理的な文章を書く」という目的と、「探究や他教科でのレポートなどで、実際に有効に活用できる技術」としての「書く力」を育むという目標が変化したわけではない。むしろ、「国語」でやっていた内容が、学校全体での取り組みへと発展していったと考えてよい。

探究活動についての指導を他の時間に回すことができた結果、さらに「書くこと」に力を注ぐことになった。ただし、週に1時間では限界もあり、大きく新しいことに踏み出しているわけではない。要約などをきめ細かく実施し、課題に対しての評価とフィードバックを行うこと、そこが充実しただけである。だけであるとは言いながらも、「書くこと」とっては非常に重要な内容変更ではある。

新しい取り組みもあった。1年生のはじめに意見文を書かせて、それを3学期が終わった段階で振り返り、どのように変化をしたのか、生徒に自覚してもらうという取り組みである。まず、構成やパラグラフ・ライティングについての知識なしに意見文を書いた場合、どれくらいのものが書け、そして、知識と技術を獲得した場合、書き振りは変わるのか。それを意識した場合、授業づくりはどのように変化していくのか、考える材料としていきたい。

RST（リーディングスキルテスト[®]）は「論理的に書くこと」という「現代文Ⅰ」「SSH現代文Ⅰ」の基本的な目標とはややずれる試みである。しかし、自分自身の言語運用能力を客観的に確認するという意味で、今後の国語科全体の流れのためにも、1・2年生で実施していくというかたちになったものである。時間の調整の結果、「国語総合」ではなく「SSH現代文Ⅰ」で実施した。

平成27年度「現代文Ⅰ」から令和3年度「SSH現代文Ⅰ」まで、授業の内容の細かな部分は毎年毎年、担

当する各教員によって異なっている。学習材、課題の内容、課題への取り組みせ方、連携する他教科等々、バリエーションは多岐にわたっている。

しかし、「論理的に書くこと」という目的についてはおれることなく、担当する教員はもちろん、生徒も「論理的に書く」とはどういうことかを自覚しながら授業に取り組むことができた。

1-3 論理的に書くこと

「論理的」とは、ある事柄についての分析・考察・説明に筋が通っており、矛盾していないことである。矛盾している説明を論理的であるとは決して言わないが、「矛盾していないだけ」で「論理的」とは判断しないだろう。単なる事実を述べた場合、例えば、「赤いペンを拾った」ということばは、矛盾はしていないが、このままでは論理的であるとも論理的でないとも判断しないのが一般的なのではないか。何らかの分析・考察・説明をともなってはじめて、論理的かどうかが問題になる。そして、自分の考察について納得してもらったり、自分の意見の妥当性を説得できたりすることが、「論理的」であるということなのだろう。

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」で育もうとしている「論理的に書くこと」を定義しようとすると、なかなか難しい。現行の学習指導要領では「イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。」^①とある。また、新しい学習指導要領でも、「現代の国語」で「(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」^④とあり、「論理国語」〔思考力、判断力、表現力〕では「情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえること。」^⑤と書かれている。しかし、論理的とはどういうことであるかは、見えづらい。例えば、野矢茂樹『論理トレーニング』では「もっとも狭い意味で『論理』と言われるとき、それは『演繹』を意味する。」^⑥としており、論理的であることを厳密に突き詰めようとする、かなり限定された状況でのことばしか対象にできなくなる恐れがある（「演繹」については、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」でも扱い、また、「SSH 探究基礎」でも扱っていく）。推論を述べる場面なら、演繹として「論理的」に書くこともできるだろうが、すべての説明がその範囲に収まるわけでもない。

国語で「論理的な文章」と言えば、説明文や評論を指すが、確かに論理的に書かれている文章もある一方で、

随筆に近いものもある。現在の教科書等の学習材における評論のあり方に疑問を呈しているわけではない。単に、「論理的な文章を書く」ことを目標にした時、随筆的な文章は手本にならないかもしれない、ということである。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は、「国語総合」や「現代文B」と異なり、そこまで教科書分類の「評論」にこだわることもない。

そこで、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」では、根拠を持った説明や、納得してもらうための構成、わかりやすいパラグラフ作りなどを積み重ねることが「論理的に書くこと」につながると考え、授業を作ってきた。「論理的」とあるとは、「内容」に関して「論理的である」という側面もちろんあるのだが、探究活動を含めたあらゆる話題について、全てに当てはまる「論理」を示すことは、おそらくできない。そうなれば、国語という範囲で教えるべきなのは、相手に伝えるときの型を示すことなのではないか。主語と述語の対応関係を確認しながら文を書く。トピックセンテンスを最初の一文に書く、というパラグラフの書き方。序論・本論・結論という構成。そのような型を、実際に書くという行為を通して身につけていけば、他教科や探究活動、そして将来において何かを書くときに役立つ「論理的に書く力」が備わっていくはずである。

型よりも、閃きや発想や感性が大切な場合もあるかもしれないが、それは「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の範囲外とする。思考の内容については、「国語総合」や2・3年の「現代文B」「古典B」で扱うことができるだろう。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は扱う範囲をあえて狭めることによって、むしろ他教科との連携を目指す科目である。型の通りに書くということで、むしろ内容こそが重要であることにもつながる。レトリックを駆使した文章が必要になる場面もあるかもしれないが（詩や小説の創作など）、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」で目指す「論理的に書くこと」は、むしろそういった修飾を外していく書き方になる。

「論理的である」とは、ある事柄についての分析・考察・説明に筋が通り、矛盾していないことであり、それはパラグラフや構成の型を通して理解することができるものである。我々はこの学校設定科目「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」において、国語で育む領域のごく一部分だけを扱った。しかし、その一部分は応用することができる部分であり、今後の探究活動を中心とした主体的な学びにつながってくる部分である。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の試みは今年度（令和3年度）で一つの区切りを迎えるが、「論理」を意識した「書くこと」の授業の蓄積は、今後の授業づくりにもつながってくるに違いない。

2 「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の実践

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」で実施されたいくつかの授業について紹介する。

2-1 1 学期（「文」を中心とする学期）

2-1-1 現代文Ⅰ導入（平成27年4月）

内 容：現代文Ⅰの年間の予定を確認する。日本語の規則について学び、語の入れ替えを行うことで日本語のあり方を意識する。

配布物：図 1 参照

課 題：授業の感想を提出

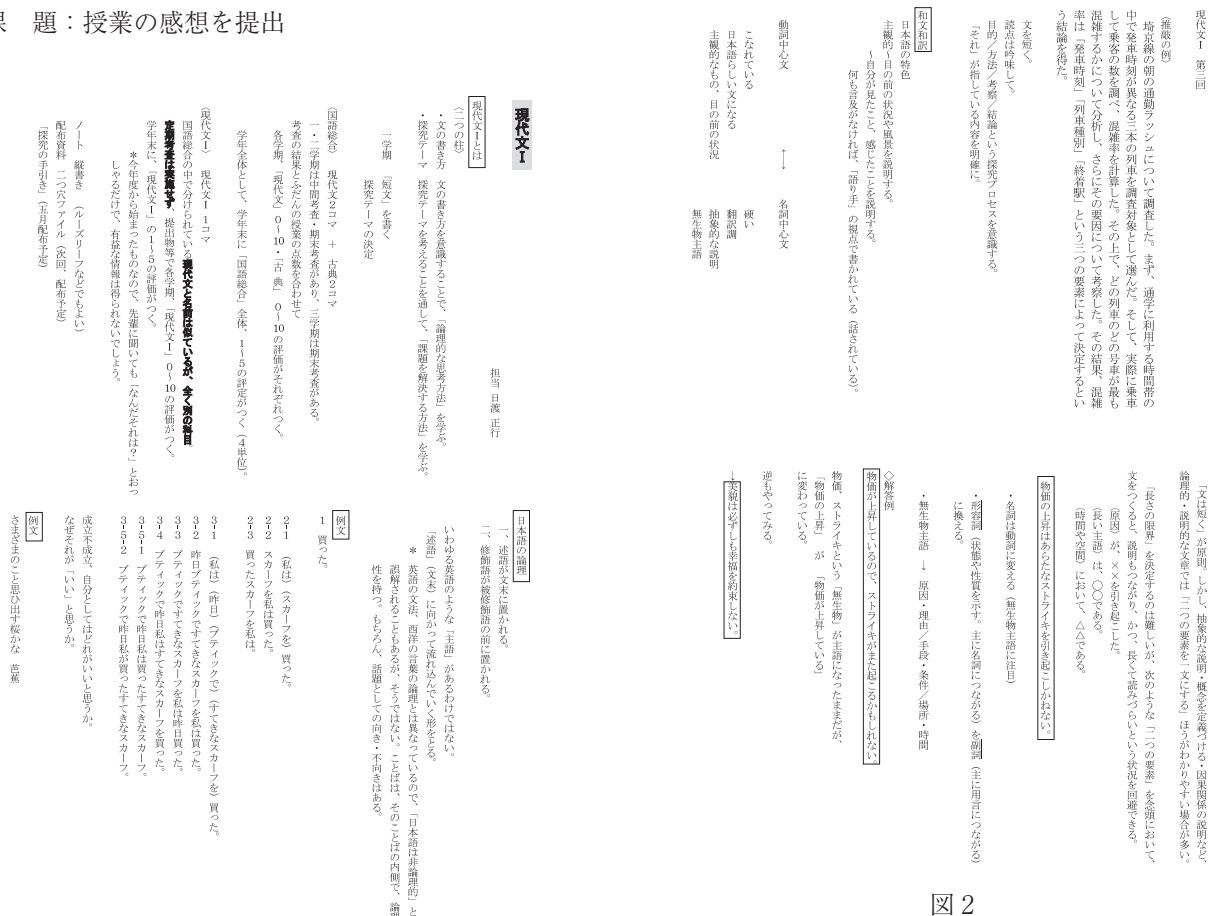


图 1

解 説：平成 27 年度から令和 3 年度まで実施された「最初の授業」。「私はスカーフを買った。」という文を「スカーフを私は買った。」に変えても、日本語として問題はない。日本語は助詞によって語の役割が決まるため、語順については緩いという特色を知ることになる。規則としての緩さがあるが、使い手が気をつけていけば、論理的なことばとして使っていくことができる点を強調している。

2-1-2 和文和訳（平成27年5月）

内 容：動詞中心文⇔名詞中心文を通して、日本語の特色をつかむ。

配布物：図 2 参照

課題：和文和訳の課題に取り組み、それを提出。

解 説：和文和訳については、野内良三『日本語作文術伝わる文章を書くために』^⑦をもとにしている。こなれた日本語である動詞中心文と、無生物を主語とした名詞中心文とを行ったり来たりすることで、それぞれの場面にふさわしい日本語の使い方の選択を促す。

2-1-3 テーマ決定の練習（平成27年5月）

内 容：探究のテーマについて考える。この段階ではあくまでもテーマを考えるという活動そのものに意味があり、そのまま2年生の探究になるということはない。

配布物：図 3 参照

課題:このときに考えた探究テーマを書いて、提出。
解説:探究テーマは「大きすぎない、答えが出せる
仮説を立てる」「探究の方法が実現可能かどうか」「既存のものではない」といったこと

に注意を向けながら、考える。この授業の内容は平成 30 年には「SSH 探究基礎」という別の授業で扱うことになった。

現代文Ⅰ (前編) 第五回

探究テーマの決り方

○ 収めている、大きすぎないテーマになっている。漠然としていないか。

手がとろく範囲の探究テーマになっているか。

漠然としている例：「花粉症」「地球温暖化について」「コロナ問題を考える」

手が届かない例：「地球の寿命」「ヒトと自然の共生」

「ここが大きい」と「何をどうやってすすめるのか」がわからなくなり迷走する。高校生として調査・実験ができるかどうか。

○ 探究の方法や方向性が明らかになっている。

手法が明らかになっていない例：

「調査表に併せて絶滅危惧種の増加を食い止める方法」

「生活環境が引き起す病気」

「できれば『問題』を見せたい。探究すること、明らかにする『問題』は何か。そして、その『問題』を解決しようとするのか(総じている)か? 何が影響してくる。」

○ すでになされている探究」ではないテーマになっている。

↓ 誰も研究していない、全く新しいこと」は無理。ただ、あるを、一冊まとめあげて終わるようなものではある意味がない。

「探究テーマをひき起す病気」

探究はどのような問題に向き合っているのか?

「花粉症」はアレルギー性鼻炎のこと。そのメカニズムに理解しよう。そのメカニズムがわかれば、アレルギーを予防できる。生活環境を改善する。アレルギーを予防できる。生活環境を改善する。アレルギーを予防できる。生活環境を改善する。

「生活環境が引き起す病気」

「がん」「心臓病」「脳血管疾患」を回避するための生活環境」

これだけ「環境が調べる」ものとしてはきすぎる。また、検査をしなければ「がん」「心臓病」「脳血管疾患」を回避するための生活環境」

「成人病から生活習慣病へ」データから見る病の名称変更の意義と効果」

わたしの「環境」としてはどのようなテーマになるだろうか。もちろん、すでに調査されている分野かもしれないが、仮にそのようなテーマを調べてみれば、探すべきデータ、読むべき本は見えてくる。

「それを見ているうちに、また次のテーマに進んでいける」

図 3

2-1-4 帰納と演繹 (令和 3 年 6 月)

内 容：帰納と演繹、特に「論理的な思考」としての演繹について学ぶ。

配布物：図 4 参照

課 題：演繹に関する課題に取り組み、提出。

解 説：野矢茂樹『新版論理トレーニング』^⑥をもとにして、演繹について考える。帰納、演繹、アブダクションについては、本校の SSH 探究で重視している概念であるが、「SSH 現代文Ⅰ」では帰納と演繹について理解する。アブダクションを含めた考え方については、「SSH 探究基礎」でも扱った。

現代文Ⅰ

思考は問きを必要とする。そして問きは誰でもいつでも得られるというものではない。いわゆる「頭のよい人」はそうした問きを得る力に恵まれていると言えるだろう。つまり、頭のよい人は思考力もある。だが、言うまでもないことだが、誰でもシャーロック・ホームズになれるわけではない。われわれのほとんどはホームズというよりもワトスンである。そこでわれらワトソンは、むしろ論理力を鍛えようというわけである。一般に論理力すなわち思考力のように思われているが、それは誤解である。論理力は思考力とは違う。だから、論理力はけっして頭のよい人だけのものではないのである。(野矢茂樹「論理トレーニング」による)

【問】この文章中で演繹として正しくない部分を指摘しなさい。

* 次に示す例を参考にしなさい。

例 1 は正しい演繹、例 2・例 3 は正しくない演繹である。

例 1 タコは 8 本足である。

ミズタコはタコである。

だから、ミズタコは 8 本足である。

例 2 タコは 8 本足である。

コブシメ (イカの一種) はタコではない。

だから、コブシメ (イカの一種) は 8 本足ではない。

例 3 タコは 8 本足である。

ジョロウグモはタコではない。

だから、ジョロウグモは 8 本足ではない。

* 演繹とは。

ある前提からなんらかの結論が導かれているとき、その前提を正しいと認めたならば、必ずその結論も正しいと認めなければならないようなとき、それは「正しい演繹」と呼ばれる。

逆に、前提を正しいと認め、かつ結論を正しいとは認めないとしても、別に矛盾していると言わないとき、それは演繹としては誤ったものとなる。

* チェックの方法。

ある論証が演繹として正しいかどうかを見るには、その前提を正しいと認めたとして、その結論を否定することが矛盾になるかどうかをチェックしてみよう。否定することが矛盾になればそれは演繹として正しいものであり、矛盾にならないのであれば、それは演繹として正しくないといえる。

図 4

2-1-5 岩石の観察 (平成 27 年 7 月)

内 容：地学基礎と連携した授業である。岩石を観察し、それを 200 字で説明する。

配布物：図 5 参照

課 題：岩石を観察し、その特徴を説明して提出。

解 説：理科 (地学基礎) と連携し、その学問領域の用語を使いながら、伝わりやすいことばと伝わりにくいことばについて考えていく。他教科と連携することで、学んできた「書くこと」についての力が、国語の領域に止まるものではないことに気付いていくはずである。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の目標は、「論理的に書く」力を、あらゆる場面で発揮することである。

【現代文Ⅰ】第9回／観察記録を書く

課題 それぞれの岩石の観察記録を180～200字で記述しなさい。その際、見て取ったことのみを書くこと（知識として知っている成因については触れない）。

※書き始める前に考えてみよう。

- (1) 観察する観点は？
- (2) 観察される事実はいくつぐらいある？
- (3) 200字って字数は多い？ 少ない？
- (4) 正確に伝わる文を書くにはどんなことに留意したらよいだろうか？
 - ・主語と述語がきちんと対応している。
 - ・修飾語と被修飾語は近くに。
 - ・読点を適切に打つ。（ひとつの事実の叙述ごとに打つとよい。）
 - ・
 - ・

1年組番〔 〕

図5

2-2 2学期（「パラグラフ」を意識する）

2-2-1 パラグラフ・ライティング入門(平成30年9月)

内 容：二学期の中心事項である、パラグラフ・ライティングについての説明。パラグラフ・ライティングができていない文章とできていない文章についての課題に取り組み、その効果について実感する。

配布物：図6、図7参照

課 題：パラグラフを意識して文章の区切りを考え、授業の振り返りも書いて提出。

解 説：2学期の目標であるパラグラフ・ライティングについて説明をしていく。主として倉島保美『論理が伝わる世界標準の「書く技術」「パラグラフ・ライティング」入門』^⑧によった。「段落」とは異なることを強調するために、「パラグラフ」という語にこだわる。パラグラフは複数の文で作られる。その文はトピックセンテンスとサポーティングセンテンスからなり、はじめの一文でトピックが明らかにされる。トピックとは、そのパラグラフの中で言いたいこと・抽象的な意見のことである。授業では、16の文を見て、パラグラフに分け

ることを通して、「トピック」について確認した（図6の下段）。また、パラグラフ・ライティングになっていない文章でも同様のことを行い（図7）、「トピック」がわかりづらいうことを確認する。「パラグラフ・ライティング」のルールそのものはそこまで複雑ではないが、2学期を通して行っても、どうしても「最初にトピックを書く」ことに抵抗を感じる生徒がいる。それでも、型としてパラグラフを意識させていく。

現代文Ⅰ

パラグラフ・ライティング

・パラグラフ、トピック

・トピックセンテンス（中心文）

・サポーティングセンテンス（支持文）

パラグラフで書かれたものの特徴

トピックセンテンスをつけて読むと、おおまかな内容が理解出来る。

1. パラグラフ・トピックを最初とするのでトピックセンテンスだけを通読して、流れがわかるという点はない。

より細かな情報、さらなる読解力、分りにくい点を具体例によって示す、そのために支持文がある。

読者は、重要なトピックを思えば、そのパラグラフだけ通読出来る。

パラグラフ・ライティングの約束が守られていると、読み手は通読出来る。

パラグラフ・ライティングの約束が守られていないと、書き手は誤解されることがある。

エッセイ、小説、詩は向いていない。

学期のころ思い出す

センテンス（文）の役割が重要になる

「短い文、長い文」「前中心文」「主中心文」「悪文検定」なる思い出のこと

課題1

倉島保美『論理が伝わる世界標準の「書く技術」

パラグラフ・ライティング入門

講義社、フルーバックス、二〇二二年

※練習のために、本来のものから「模範のこぼし」を省略しました。

1. パラグラフ・ライティング入門

2. 仮ベースアップをいじり、証明の順序を維持しきれなくなりました。

3. 競争力のある野に絞って、結果的に競争の場には勝てない高層者もいます。

4. 結果として、年功序列型資金調達が維持されているのは、総人件費の割合を圧迫してしまっています。

5. 総人件費を減らすために、多くの企業が成果主義を導入しました。

6. 限られた原資（総人件費）を分配するに、実績に応じて配分するのが最も従業員の士気を高めると考えられたからです。

7. 現在、年功（〇〇倍）以上の企業では、8割以上が何らかの形で成果主義を導入しています。

8. 中小企業も、6割が成果主義を導入しています。

9. その成果主義にも問題が出てきました。

10. まず、公平な評価が難しいため、評価不満を持つのが増えました。

11. 成果として直視される仕事を優先し、部下育成のような目標設定にはない仕事を軽視するようになりました。

12. 目先の目標達成ばかり目先行で、チャレンジしなくなりました。

13. この問題に対して、成果主義に修正を加える動きも出てきました。

14. S商事では、大卒の若手社員に対しては、入社後十年間は給料に個人金をつけないように変更しました。

15. K建設は、人事評価の尺度に「後輩育成」を導入しています。

16. E電機は、個人目標の達成度に加え自分の部署への貢献度も評価するように変更しました。

図6

「論理的に書く力」を獲得する授業

1. 偏見が根柢に対する批判は、最も重要なところ、悪い面がクリアアップされない、と思う。
2. その多の偏見にしろ、手からそれるものがある、事実である。
3. しかし、偏見が根柢主義的な教育、生徒の個性を完全に押しつけているし、生徒の傷つきやすい心をゆがんだものとしてしまっていると思う。
4. それに、偏見で人間を評価するというやり方が中学、高校だけでなく、就職する際にも見られる。やはり教育現場での偏見が根柢主義的なものである。
5. 偏見の社会的適性、大学の偏見だけでは絶対に関われない、むしろ、偏見に学歴社会が染み付いている。
6. だから、偏見をすべて、という考えや、やりかたはいいないと思う。
7. しかし、偏見が根柢主義的なもの、それがいかにかかには、そのころはつらかった、と考えを一つとてできない。
8. 知り合の中学の先生が、昨年、著者注、偏見が根柢主義から排除された最初の生は、愛知県の、非常に、昨年、著者注、偏見が根柢主義から排除された最初の生は、ある意味では、偏見は教師の愛知県をかなり染み付く、と、偏見が根柢主義である。
9. 教師が先をうた、ただ、偏見を導入するのは、かかと思いが、しかし、教師の時間、体力、能力は有限である。
10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

図 7

2-2-2 パラグラフを意識した要約（令和3年9月）

内 容：パラグラフ・ライティングにつなげることを意識した、要約の授業。この時は、寺田寅彦「科学者と頭」の要約に取り組んだ。配布物：寺田寅彦「科学者と頭」課題：要約を完成させ、入力する。

解 説：図8は授業のスライドを印刷したものである。令和3年度は、新型コロナウイルスへの対応もあり、パワーポイントでの資料作成が多くなった。また、提出に関しても従来の配布プリントや原稿用紙に書いてもらうだけでなく、Google フォームへの入力なども増えてきた。スライドの内容としては、トピックをおさえる、抽象／具象を明らかにする、対比を確認する、といったことを重視しながら、文章に合わせて説明をしている。ややもすると「書くこと」よりも「読むこと」に傾く恐れがあるので、あくまでも「要約」を「書く」ことを目的としていることを強調していた。

| | |
|---|--|
| <p>SSH現代文Ⅰ「要約について」</p> <p>図8 図9 図10 図11 図12 図13 図14 図15 図16 図17 図18 図19 図20 図21 図22 図23 図24 図25 図26 図27 図28 図29 図30 図31 図32 図33 図34 図35 図36 図37 図38 図39 図40 図41 図42 図43 図44 図45 図46 図47 図48 図49 図50 図51 図52 図53 図54 図55 図56 図57 図58 図59 図60 図61 図62 図63 図64 図65 図66 図67 図68 図69 図70 図71 図72 図73 図74 図75 図76 図77 図78 図79 図80 図81 図82 図83 図84 図85 図86 図87 図88 図89 図90 図91 図92 図93 図94 図95 図96 図97 図98 図99 図100 図101 図102 図103 図104 図105 図106 図107 図108 図109 図110 図111 図112 図113 図114 図115 図116 図117 図118 図119 図120 図121 図122 図123 図124 図125 図126 図127 図128 図129 図130 図131 図132 図133 図134 図135 図136 図137 図138 図139 図140 図141 図142 図143 図144 図145 図146 図147 図148 図149 図150 図151 図152 図153 図154 図155 図156 図157 図158 図159 図160 図161 図162 図163 図164 図165 図166 図167 図168 図169 図170 図171 図172 図173 図174 図175 図176 図177 図178 図179 図180 図181 図182 図183 図184 図185 図186 図187 図188 図189 図190 図191 図192 図193 図194 図195 図196 図197 図198 図199 図200 図201 図202 図203 図204 図205 図206 図207 図208 図209 図210 図211 図212 図213 図214 図215 図216 図217 図218 図219 図220 図221 図222 図223 図224 図225 図226 図227 図228 図229 図230 図231 図232 図233 図234 図235 図236 図237 図238 図239 図240 図241 図242 図243 図244 図245 図246 図247 図248 図249 図250 図251 図252 図253 図254 図255 図256 図257 図258 図259 図260 図261 図262 図263 図264 図265 図266 図267 図268 図269 図270 図271 図272 図273 図274 図275 図276 図277 図278 図279 図280 図281 図282 図283 図284 図285 図286 図287 図288 図289 図290 図291 図292 図293 図294 図295 図296 図297 図298 図299 図300 図301 図302 図303 図304 図305 図306 図307 図308 図309 図310 図311 図312 図313 図314 図315 図316 図317 図318 図319 図320 図321 図322 図323 図324 図325 図326 図327 図328 図329 図330 図331 図332 図333 図334 図335 図336 図337 図338 図339 図340 図341 図342 図343 図344 図345 図346 図347 図348 図349 図350 図351 図352 図353 図354 図355 図356 図357 図358 図359 図360 図361 図362 図363 図364 図365 図366 図367 図368 図369 図370 図371 図372 図373 図374 図375 図376 図377 図378 図379 図380 図381 図382 図383 図384 図385 図386 図387 図388 図389 図390 図391 図392 図393 図394 図395 図396 図397 図398 図399 図400 図401 図402 図403 図404 図405 図406 図407 図408 図409 図410 図411 図412 図413 図414 図415 図416 図417 図418 図419 図420 図421 図422 図423 図424 図425 図426 図427 図428 図429 図430 図431 図432 図433 図434 図435 図436 図437 図438 図439 図440 図441 図442 図443 図444 図445 図446 図447 図448 図449 図450 図451 図452 図453 図454 図455 図456 図457 図458 図459 図460 図461 図462 図463 図464 図465 図466 図467 図468 図469 図470 図471 図472 図473 図474 図475 図476 図477 図478 図479 図480 図481 図482 図483 図484 図485 図486 図487 図488 図489 図490 図491 図492 図493 図494 図495 図496 図497 図498 図499 図500 図501 図502 図503 図504 図505 図506 図507 図508 図509 図510 図511 図512 図513 図514 図515 図516 図517 図518 図519 図520 図521 図522 図523 図524 図525 図526 図527 図528 図529 図530 図531 図532 図533 図534 図535 図536 図537 図538 図539 図540 図541 図542 図543 図544 図545 図546 図547 図548 図549 図550 図551 図552 図553 図554 図555 図556 図557 図558 図559 図560 図561 図562 図563 図564 図565 図566 図567 図568 図569 図570 図571 図572 図573 図574 図575 図576 図577 図578 図579 図580 図581 図582 図583 図584 図585 図586 図587 図588 図589 図590 図591 図592 図593 図594 図595 図596 図597 図598 図599 図600 図601 図602 図603 図604 図605 図606 図607 図608 図609 図610 図611 図612 図613 図614 図615 図616 図617 図618 図619 図620 図621 図622 図623 図624 図625 図626 図627 図628 図629 図630 図631 図632 図633 図634 図635 図636 図637 図638 図639 図640 図641 図642 図643 図644 図645 図646 図647 図648 図649 図650 図651 図652 図653 図654 図655 図656 図657 図658 図659 図660 図661 図662 図663 図664 図665 図666 図667 図668 図669 図670 図671 図672 図673 図674 図675 図676 図677 図678 図679 図680 図681 図682 図683 図684 図685 図686 図687 図688 図689 図690 図691 図692 図693 図694 図695 図696 図697 図698 図699 図700 図701 図702 図703 図704 図705 図706 図707 図708 図709 図710 図711 図712 図713 図714 図715 図716 図717 図718 図719 図720 図721 図722 図723 図724 図725 図726 図727 図728 図729 図730 図731 図732 図733 図734 図735 図736 図737 図738 図739 図740 図741 図742 図743 図744 図745 図746 図747 図748 図749 図750 図751 図752 図753 図754 図755 図756 図757 図758 図759 図760 図761 図762 図763 図764 図765 図766 図767 図768 図769 図770 図771 図772 図773 図774 図775 図776 図777 図778 図779 図780 図781 図782 図783 図784 図785 図786 図787 図788 図789 図790 図791 図792 図793 図794 図795 図796 図797 図798 図799 図800 図801 図802 図803 図804 図805 図806 図807 図808 図809 図810 図811 図812 図813 図814 図815 図816 図817 図818 図819 図820 図821 図822 図823 図824 図825 図826 図827 図828 図829 図830 図831 図832 図833 図834 図835 図836 図837 図838 図839 図840 図841 図842 図843 図844 図845 図846 図847 図848 図849 図850 図851 図852 図853 図854 図855 図856 図857 図858 図859 図860 図861 図862 図863 図864 図865 図866 図867 図868 図869 図870 図871 図872 図873 図874 図875 図876 図877 図878 図879 図880 図881 図882 図883 図884 図885 図886 図887 図888 図889 図890 図891 図892 図893 図894 図895 図896 図897 図898 図899 図900 図901 図902 図903 図904 図905 図906 図907 図908 図909 図910 図911 図912 図913 図914 図915 図916 図917 図918 図919 図920 図921 図922 図923 図924 図925 図926 図927 図928 図929 図930 図931 図932 図933 図934 図935 図936 図937 図938 図939 図940 図941 図942 図943 図944 図945 図946 図947 図948 図949 図950 図951 図952 図953 図954 図955 図956 図957 図958 図959 図960 図961 図962 図963 図964 図965 図966 図967 図968 図969 図970 図971 図972 図973 図974 図975 図976 図977 図978 図979 図980 図981 図982 図983 図984 図985 図986 図987 図988 図989 図990 図991 図992 図993 図994 図995 図996 図997 図998 図999 図1000</p> | <p>SSH現代文Ⅰ「要約について」</p> <p>図8 図9 図10 図11 図12 図13 図14 図15 図16 図17 図18 図19 図20 図21 図22 図23 図24 図25 図26 図27 図28 図29 図30 図31 図32 図33 図34 図35 図36 図37 図38 図39 図40 図41 図42 図43 図44 図45 図46 図47 図48 図49 図50 図51 図52 図53 図54 図55 図56 図57 図58 図59 図60 図61 図62 図63 図64 図65 図66 図67 図68 図69 図70 図71 図72 図73 図74 図75 図76 図77 図78 図79 図80 図81 図82 図83 図84 図85 図86 図87 図88 図89 図90 図91 図92 図93 図94 図95 図96 図97 図98 図99 図100 図101 図102 図103 図104 図105 図106 図107 図108 図109 図110 図111 図112 図113 図114 図115 図116 図117 図118 図119 図120 図121 図122 図123 図124 図125 図126 図127 図128 図129 図130 図131 図132 図133 図134 図135 図136 図137 図138 図139 図140 図141 図142 図143 図144 図145 図146 図147 図148 図149 図150 図151 図152 図153 図154 図155 図156 図157 図158 図159 図160 図161 図162 図163 図164 図165 図166 図167 図168 図169 図170 図171 図172 図173 図174 図175 図176 図177 図178 図179 図180 図181 図182 図183 図184 図185 図186 図187 図188 図189 図190 図191 図192 図193 図194 図195 図196 図197 図198 図199 図200 図201 図202 図203 図204 図205 図206 図207 図208 図209 図210 図211 図212 図213 図214 図215 図216 図217 図218 図219 図220 図221 図222 図223 図224 図225 図226 図227 図228 図229 図230 図231 図232 図233 図234 図235 図236 図237 図238 図239 図240 図241 図242 図243 図244 図245 図246 図247 図248 図249 図250 図251 図252 図253 図254 図255 図256 図257 図258 図259 図260 図261 図262 図263 図264 図265 図266 図267 図268 図269 図270 図271 図272 図273 図274 図275 図276 図277 図278 図279 図280 図281 図282 図283 図284 図285 図286 図287 図288 図289 図290 図291 図292 図293 図294 図295 図296 図297 図298 図299 図300 図301 図302 図303 図304 図305 図306 図307 図308 図309 図310 図311 図312 図313 図314 図315 図316 図317 図318 図319 図320 図321 図322 図323 図324 図325 図326 図327 図328 図329 図330 図331 図332 図333 図334 図335 図336 図337 図338 図339 図340 図341 図342 図343 図344 図345 図346 図347 図348 図349 図350 図351 図352 図353 図354 図355 図356 図357 図358 図359 図360 図361 図362 図363 図364 図365 図366 図367 図368 図369 図370 図371 図372 図373 図374 図375 図376 図377 図378 図379 図380 図381 図382</p> |
|---|--|

A と連携することで、クラス内での共通認識を活かして説明することができた。その一方で、国語の教員である私の地理用語の認識不足も露呈してしまった。視覚情報を言語化するとき、情報をいかに精選するかということと、説明する相手が何を知っているかによって使うべきことばが変わっていくことを、生徒は理解していた。

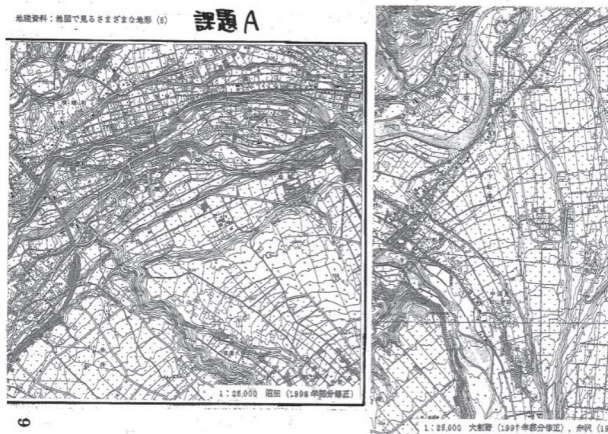
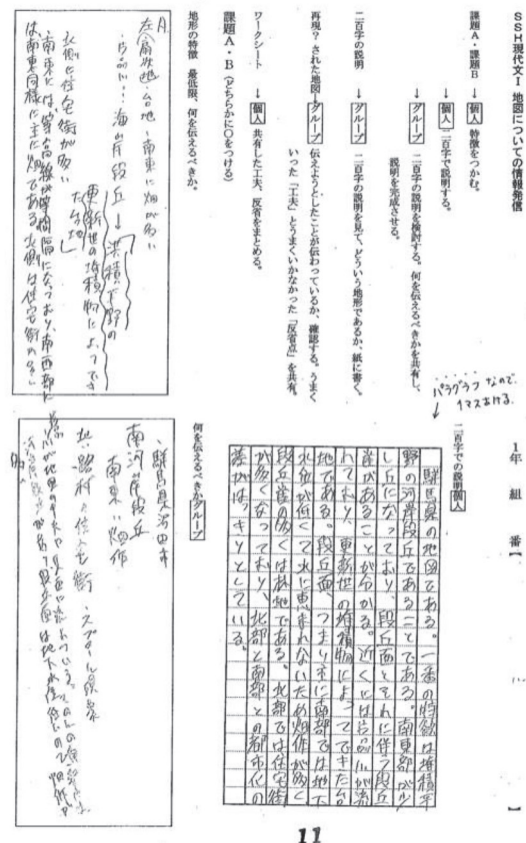
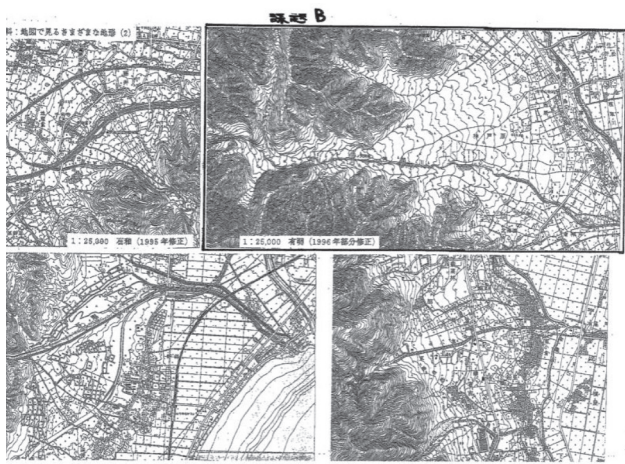
図 10⁹

図 12

図 11¹⁰

2-2-4 200字意見文（令和3年11月）

内 容：環境保全についての文章を読み、自分の意見を200字で書く。

配布物：小論文問題¹¹「保全」か「保存」か

課 題：Google フォーム（図 13）に意見を入力。

解 説：どちらも外来種であるモウソウチクとブラックバスについて、架空の市民団体が述べる意見（モウソウチクもブラックバスと同様に排除して、本来の日本の風景を取り戻すべきである）に反論する。生徒にはループリック（図 14）を示した。ループリックは3学期の800字意見文のループリックをもとにして作成し、「内容」「構成（パラグラフ）」「表現（誤字脱字等がない）」で評価した。

【SSH現代文Ⅰ】1学期のまとめテスト(30分間)

課題 以下の文章は、朝日新聞の朝刊(2021年5月21日付)に掲載された※「ごはんラボ」の記事を7箇所改変したものです。1学期に学習したことをもとに、読み手に伝わる文章に書き直さない。改めたところはわかるように赤字にし、解答欄に書き直さない。

※ごはんラボ...家で食べたい基本のメニューを、おいしく、楽しく作れるように、調理科学の視点から合理的なレシピを探ります。初心者には料理力が身につく、ベテランにも発見がある食の情報。

今回のテーマは保存とおいしさを両立させる冷凍術です。鶏胸肉を素材に、よりおいしくなる冷凍方法を有馬邦明シェフに教えます。
注意すべきは素材の水分。水分の凍結は細胞破壊へと帰結し、急激な解凍は肉汁の流出をもたらします。
それを防ぐために、ほどよく肉の水分を抜いてから凍らせると、冷凍で日持ちがよくなるだけでなく、水分を抜くことでうまみ成分が凝縮され、よりおいしくなると一石二鳥です。キッチンペーパーやさらしに巻くだけでも効果はあります。まめに取れかえないと出てきた水分が表面で酸化し、においが移ってしまいます。
そのため、今回は専用のアイテム「脱水シート」を使いました。使い方は簡単。肉をシートに包み、冷蔵庫に数時間置くだけ。その後、ラップに包み替えて冷凍され、調理の前に解凍します。(小林未来)

68期 組 番 氏名

図 17

3 新しい学習指導要領との関わり

3-1 「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の意義と課題

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は、学校設定科目として、教科書を使わずに授業と課題を作ったことが大きな特色である。「国語表現」などの教科書など、テキストとして使えるものがあるかどうか、模索はしたものの、結局、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の目的に合致するテキストはなかった。文章の書き方に関して、論理の組み立て方に関して、論的とはどういうことかについて、探究テーマの仮説に関して（探究のテーマについては、後に「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」からは離れたけれども）、様々な書籍の内容を切り貼りして作り上げていったのが、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」である。本稿の「2『現代文Ⅰ』『SSH 現代文Ⅰ』の実践」で示したのはその一部であり、内容も補助テキストも常に手探りであった。

「良い文章とはどのようなものか」「論理的とはどういうことか」「探究のテーマと向き合うにはどうしたらいいか」といったことに、我々が真剣に向き合うことができた意義は大きい。これまでも通常の国語の授業（「国

語総合」「現代文B」）において、「論理」や「書くこと」の力を育む授業を実施してこなかったわけではない。しかし、1年間を通して「論理的に書くこと」に取り組み、その力を獲得するという目標が掲げられたとき、しっかりと土台から考えないわけにはいかなかった。そして、「論理的に書く」ことは、意外にも定義が見えづらく、評価するのも容易ではないということがわかってきた。明確な方法が定着したわけではないが、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の試行錯誤の中で、どうすれば生徒が自覚的に「論理的に書くこと」に取り組めるのか、少しでも見えてきたところである。目的が「論理的に書くこと」に集中しているからこそ、それが達成できていないときには方向性が間違っていることが明確にわかる。それをどのように修正していけばいいかということも、目的が絞られているのでわかりやすい。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の授業を作っていくことで、「論理」「書くこと」への理解がさらに深まったのである。

その一方で、授業の効果の検証についての検証は十分な面も残ってしまった。生徒の書くことに対する意識は高まり、力も十分についてきているという実感はある。また、他教科からも生徒の意識が変わり、効果があったという話を聞いている。課題を与え、生徒を評価し、フィードバックし、というサイクルのなかで、より良い授業が出来上がってきている。しかし、本来の目的であった他教科や探究活動において、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」で獲得した力が十分に発揮できているかどうかは明確に捉えられていない。教科の外に向かう視点を持ちながらも、結局のところ、科目のなかでの評価、それ以上のことはできていないのが現状である。

授業づくりのみに集中するのではなく、学習全般における「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の位置づけも問わなければならない。学習全般における位置づけをはっきりさせる手段として有効なのが、他教科との連携である。ところが、残念ながら、令和2年に新型コロナウイルスへの対応が始まってから、他教科との連携は停滞している。本来であれば、他教科との連携によって、獲得した「論理的に書く」力がどのように発揮されるか見ることができたのであり、また、他教科がどのようなことを国語に期待しているのかもわかったはずである。しかし、連携の停滞によって、そこが可視化できなくなってしまっていることが問題であり、国語以外の場面で力を出すことができるかどうかを確認することが、今後の課題であろう。

また、生徒の内側で国語の力がきちんと統合されてい

るのか、あるいはどうすれば統合させられるのか、ということも課題である。「書くこと」が完全に孤立して発揮されることはなく、「読むこと」「聞くこと」「話すこと」といった他の国語の力と統合されて、はじめてことばのより良い運用につながっていく。実際に、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の授業でも、要約・意見文を書くときには前提となる「課題文」を「読解」することが多かった。「読むこと」が混じってくることで自体は仕方ないことで、純粋に「何かを書くこと」だけを行うのは非常に難しいことであるし、「書くこと」だけにこだわった「国語」に意味はないだろう。「書くこと」「読むこと」「聞くこと」「話すこと」は、いずれもことばの力として相互に関わっているし、国語はそれらの力を総合的に伸ばしていかなければならない。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」はそのなかの「書くこと」に特化しているからこそ意義があると考えてはいるが、授業を離れた場面では、生徒自身の内側でそれらが統合されなければならない。「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」だけで考えていくと、この「統合」させるという点が弱点となっている、と言える。

令和4年度から学校設定科目としての「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」はなくなってしまい、「論理的に」「書くこと」は、国語の領域内で扱っていくことになる。ここであげた意義をきちんと理解しつつ、課題について取り組んでいかなければならない。継続すべきところと改めるところを明確にしながら、違う形で「論理的に書く」力を培っていく必要がある。

3-2 今後の展開

「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は令和3年度でカリキュラムから姿を消すが、発信することの重要性はますます高まってきている。次の学習指導要領でも「(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」^④（「現代の国語」。「言語文化」にも同じ目標が掲げられている）「(2) 論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」^⑤（「論理国語」）とあり、「論理」と「他者との関わりの中で伝え合う力を高める」ことが強く結びつけられている。今後はこれまで以上に「発信すること」に生徒の意識が向かわなければならない。そして、「書くこと」は、「現代の国語」で30～40時間、「論理国語」では50～60

時間、割り当てなければならない、具体的に「書くこと」の授業を計画しなければならないことになったのである。

「書くこと」を意識した授業づくりにおいて、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」で培った方法は、生徒の自覚を促すという意味で、非常に有効である。「論理的に書く」ことを目的にしており、「論理的であるとはどういうことか」「書く力を何のために身につけるのか」ということを明らかにしながら、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」は作られてきた。そのような授業は、生徒の「書くこと」への自覚を確実に促すだろう。その蓄積が、今後の新しいカリキュラムの中でも活かされていく。

令和4年度からは、具体的には「現代の国語」において「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」の取り組みが活かされていくはずである。今後は、他の国語で育むべき力（「読む」「話す」「聞く」）との関係性・他教科や探究活動との関係性・学校を卒業した後の「書くこと」との関係性といった、「論理的に書くこと」とその外側との関係性が重要になってくる。それは「現代の国語」の中での力の統合という課題でもあるし、「論理的に書く」力が発揮される場面の問題でもある。書くことについての知識や技術から出発して、論理的に思考する力を養い、全ての教科の基礎となり、生涯にわたることばの力が獲得できるよう、「現代文Ⅰ」「SSH 現代文Ⅰ」で築き上げたもの（具体的な授業の方法、あるいは、授業を作り上げていく意識）を次の段階へとつなげていきたい。

〈注〉

- ①『学習指導要領』「第2章 各学科に共通する各教科 第1節 国語 第2款 各科目 第1 国語総合」2009年
- ②本校の1年生が受ける授業。月1回、土曜日の4時間を使って実施されている。探究を進めていくための講座（仮設のたて方・テーマ決定、演繹や帰納について、統計処理等々）と研究者による講演からなる。2年生で本格的に各自の探究を進めていくための基礎を身につける授業である。
- ③リーディングスキルテストについては、「教育のための科学研究所」ホームページ（<https://www.s4e.jp/>）参照。
- ④『学習指導要領』「第2章 各学科に共通する各教科 第1節 国語 第2款 各科目 第1 現代の国語」2018年
- ⑤『学習指導要領』「第2章 各学科に共通する各教科 第1節 国語 第2款 各科目 第3 現代の国語」

2018 年

- ⑥野矢茂樹『新版論理トレーニング（哲学教科書シリーズ）』産業図書、平成 18 年
- ⑦野内良三『日本語作文術 伝わる文章を書くために』中央公論新社（中公新書）、平成 22 年
- ⑧倉島保美『論理が伝わる世界標準の「書く技術」「パラグラフ・ライティング」入門』講談社（講談社ブルーバックス）平成 24 年
- ⑨「国土交通省国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 沼田（1998 年部分修正）」「国土交通省国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 大割野（1997 年部分修正）、赤沢（1994 年修正）」
- ⑩「国土交通省国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 有明（1996 年部分修正）」「国土交通省国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 石和（1995 年修正）」「国土交通省国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 海津（1999 年部分修正）」「国土交通省国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 養老（1997 年部分修正）」
- ⑪代々木ゼミナール『2013 新小論文ノート』代々木ライブラリー、平成 24 年